



OAK



British Trad Review

Editorial

果たしてどの程度の反応があるのか全く見当がつかないままにスタートした、「フリティッシュ・トラッド愛好会」でしたが、全く予想外とも言える程の反響があり、北は北海道から、南は九州まで、日本全国から沢山のの手紙を頂き、日本にもこんなに沢山のフリティッシュ・トラッドを好きな人が居たのかと、今さらながら驚いている次第です。

定例会の方も、現在まで2回井ブラック・ホークが満員になるという盛況を見せ、会員による演奏も乗ける様になり、これから先がますます楽しみという所です。

「OAK」についても、沢山励ましの言葉を頂きましたが、同時に「もう少し量が加ければ良いのだが」とい

う意見も幾つか見られました。しかし、当会はあくまでも趣味の業まりであり、スタッフはそれぞれ自分の仕事なり学業を持つ身ですので、このペース(隔月刊)でこのレベルを保って発行し続ける事が、今は精一杯であり、又、当会としては現在のままで也十分充実した内容を持っていると、自負していますので、今後も無理な増ページはせずに、このペースでこの内容を保って発行してゆきたいと考えています。

ただ、「OAK」が一体どの様に読まれているのか、という事は常に意識してゆきたいと考えていますので「OAK」を通じての一方的な情報提供に終わらない様に、どしどし御質問、御意見等をお寄せ下さい。

23rd October 1977 Y. MORRI

「フリティッシュ・トラッド愛好会」 British Trad Appreciation Society (B.T.A.S.)

運営委員-松平維秋, 森 能文, 遠藤 斗志也
顧問-栗野和子
協 力-大山大山 聡, 薄 仁, ブラック・ホーク etc.
連絡先-〒150 東京都渋谷区道玄坂 2-18-3
ブラック・ホーク内
「フリティッシュ・トラッド愛好会」

定例会
・毎月第4日曜日
・12:00 AM~2:00 PM (11:00 AMから来店可能)
・場所: ブラック・ホーク

「OAK - British Trad Review」 No. 2

発行人-フリティッシュ・トラッド愛好会
編集人-森 能文
板下製作-薄 仁, 森 能文,

1977年10月23日発行
© <無断転載を禁ず> 定価 100 円

OAK-British Trad Review is published bi-monthly by British Trad Appreciation Society % Black Hawk 2-18-3 Dogenzaka Shibuya-ku Tokyo, Japan.
Overseas subscription rates, 3 issues: £1.00

NEWS

(担当:遠藤 斗志也)

• 全米と英国を腿にかけて活躍するボーイズ・オブ・ザ・ロックが、今度はオーストラリアとニュージーランドへのツアーを行なう。詳しい日程は未定だが、今年の10月から11月にかけてということ

• 新しいライン・アップになったヘッジホッグ・パイ (Hedgehog Pie-テイヴ・パーランド、ジェド・グライムス、ミック・ドゥーナン) はプロデューサーにジョフ・ハスロック、エンジニアにミック・スウィーニーを迎えてレコーディング中である。

• ロビン&パリー・ドラムスフィールドがデュオとしての活動を再開する。経済的な問題でエレクトリックバンドとしてのドラムスフィールドは今年はじめに解散したが、今度は、アコースティック・スタイルでレコーディングも行なう。といっても、このデュオは恒久的なものではなく、「ぼく達はデュオで仕事をするのはもちろん楽しいが、又、ソロで仕事をするのも楽しいんだ。」(パリー・ドラムスフィールド)ということだ。

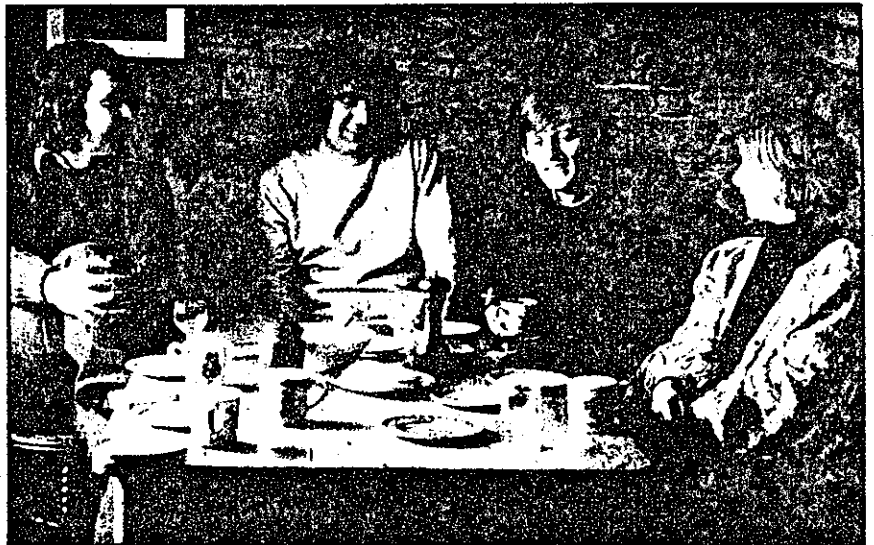
• チリでは、4年前、軍部が政権を掌握して以後、現在も人民への厳しい弾圧が行なわれているが、そのチリから亡命してきたバンド、クウィラパユン (Quilapayun) が、しばらくの間活動の拠点にしてきたフランスを離れて、再び英国に帰ってきた。彼らは、9月25日にはロンドンで、パート・ヤンシュと共に "コンサート・フォー・チリ" と題されたコンサートを開く模様。ここでは、4年前のクーデターの際、捕えられ死したヴィクトル・ハラ (Victor Jara) の歌も唄われるそうだ。

• トニー・ローズ、ニック・ジョーンズ、ピート&クリス・コウが結成したバンド、バンドッグス (Bandogs) は、現在そのアルバムをレコーディング中である。コンサート・ツアーも年内に行なわれるという。新生スティールアイと共に最も注目されているバンドだけに、アルバム発売が待たれる。(右は、バンドッグスの4人。)

• ジューン・テイバーのニュー・アルバム "Ashes And Diamonds" は10月上旬、リリースされる。バックにはニック・ジョーンズ、トニー・ホール、リック・ケンプ、ナイジェル・ヘグラム達がついて、前作以上にポピュラリティを重視した布陣となっているが、それが成功するかどうか。収められる曲は、"Reynard The Fox", "The Earl of Aboyne", "The Easter Tree", "Lisbon", "Street of Forbes", "Clerk Saunders", "Lord Maxwell's Last Goodnight", "The Devil and Baliff McGlynn"。

• アシュリー・ハッチングスの製作するダンス・ミュージック・アルバム "Kicking Up The Sawdust" は、11月にハーヴェスト・レーベルからリリースされる。バックには、ジョン・タムス (メロディオン)、ジョン・ロッド (アングロ・コンサルティーナ)、グレイム・テイラー (エレキ・ギター)、マイク・グレイリー (ドラムス)、ピート・パロック (サクソ、シンセサイザー 他) 達のアルピオンズに加えて、ポップ・キャン、ジミー・ワーバー等のトラディショナル・ミュージシャンも参加するらしい。

• 英国のリバイバル・フォーク・シンガーの草分け的存在だったデイヴィ・グレアムは、このところ、あまりニュースが伝えられてこなかったが、最近、カール・ダラスの祝賀コンサートに飛び入りで出演し、元気な姿を見せた。彼は又、ステファン・グロスマンのキッキング・ミュージック・レコードと契約したばかりで、ジョン・レンバーンをプロデューサーとして製作したアルバムが、来年早々には発売される予定。



TONY ROSE/NIC JONES/PETE COE/CHRIS COE

NEW ALBUMS

THE BATTLEFIELD BAND "Battlefield Band (TOPIC 12TS 313)

ALBA "Alba" (RUBBER RECORDS RUB 021)

アイルランドには、Planxty、Bothy Band、Chief-tains、といった様なレベルの高いアイリッシュ・トラッド専門のグループが沢山ありますが、スコットランドには今までそれらに匹敵する様なグループは見あたりませんでした。もちろんスコティッシュ・トラッドを手掛けるグループとしては、有名な Boys of the Lough が有りますが、彼等も半分はアイリッシュなのでスコティッシュ・トラッド専門のグループとは言えません。また、現在ではスコティッシュ・グループというところ、どういふ訳か人気のある Five Hand Reel が考えられますが、実際の彼等のトラッドに対するアプローチの仕方は全く程度が低く、グループとして十分なレベルにあるとは思えません。その様な中で遂にスコットランドにも2つの素晴らしいグループが登上しました。それが今回紹介する "Battlefield Band" と "Alba" です。

Battlefield Bandはグラスゴー出身の4人組で、用いられる楽器はフィドル、マンドリン、シターン、ギター、コンセルティーナ、オルガン、ホウキッスル等。取り上げる素材は2、3のアイリッシュ・リールの他は、総てスコットランドのジグ、リール、ストラスペイ、マーチそしてソングやバラッドです。楽器の演奏レベルは非常に高く、沢山取り上げられたパイプ・チューンではマンドリンとシターンの巧みな演奏で、裝飾音に特長のあるハイランド・パイプ独特の雰囲気を見事に表現しています。又、それらのマーチやダンス曲に於て、むやみにスピード・アップする事なく適度なテンポを保って演奏する事に非常に好感を覚えます。ポーカーも非常に魅力的で、Dick Gaughanや Archie Fisherにも通じる典型的なスコッツの歌いぶり、Archie Fisher等のベソになる "The Shipyard Apprentice" や、"The Brisk Young Lad" "It was All for Our Rightful King" 等では淡味のある素晴らしいシンギングを聴かせます。中でもアルバム最後に収められたビッグ・バラッドの "Cruel Brother" (Child No.11) は非常にスリリングにアレンジされていて、新しい解釈に基づくバラッド・シンギングとしては最高の出来だと思えます。

この様にこの Battlefield Band は演奏と歌とが、今、望みうる最高のレベルでバランスした、素晴らしいグループで、このアルバムに関しては全く欠点が見あたりません。

プロデュースは Boys の、Robin Morton が行ない、彼はライナーに紹介文も寄せています。

Alba ("Alba" とはスコットランド、ハイランド地方の古い呼び名 "Albania" - 東欧の国ではない - の短縮形です。) は元 J.S.D. バンドの Sean O'Rourke がアイルランドで Planxty や Bothy Band がやっている事をスコットランドでやるとういう考えのもとに結成した4人組で、楽器編成はギター、マンドリン、バズーキ (Bazouki)、ライヤー (Lyre、リラ)、フィドル等のストリングス楽器を主体にして、フルート、ホウキッスルというウィンド楽器を加えています。何と云ってもこの Alba の特長はそのメンバーの中にハイランド・パイパーを入れているという所にあります。

スコティッシュ・トラッドに於いてパイプ・チューンというのは欠くべからざるものなので、今までのグループではそれらのパイプ・チューンをフィドルやマンドリン等のストリングス楽器を用いて演奏していましたが、このグループに至ってやっと本物のハイランド・パイプを用いたグループが生まれたわけです。Boys も最近のツアーにパイパーを同行させたり、最新アルバムでも何曲が共演したりしていますが、あくまでもゲスト出演という形なので Alba の場合は異なります。

ここでハイランド・パイプを演奏する Alan MacLeod というのはまだ10代の若者だということですが、その技量から考えてすでに10年以上のキャリアはあると思われれます。というのもハイランド・パイプというのは10年になって手を出して独学で練習した位で修得できる様な楽器ではなく、小さい時からちゃんとした指導者についてみっちり練習を積み重ねてやっと一人前になれるという楽器なのでスコットランド人で "パイパー" と言ったら子供の時からやっていると考えてさしつかえないのです。筆者も今春スコットランドでパイプ・バンドのコンテストを見た時、まだ5、6才位の若者達が素晴らしい演奏をするのを沢山見ました。Alan MacLeod もその様な人間らしく、スロー・エアーから、アップテンポのジグやホーン・パイプまでハイランド・パイプを始めてまだ2年にしかならない筆者から見たら信じられない様な素晴らしい演奏を展開します。(7ページへつづく)

BALLADS

"The Cruel Mother" (Child No.20) "残酷な母親"

from the singing of Dave And Toni Arthur
in their Album "Harken To The Wiches Rune" Trailer LER 2017

There was a lady came from York,
All alone and a-lonely
She fell in love with her father's clerk.
All down by the greenwood sidie.

ひとりの女がヨークから来た
ただひとり、ひとり寂しく
彼女は父の執事に恋した
緑の森の辺に

She loved him well, she loved him long,
At last she proved with child by him.

彼女は彼を深く愛した、長く愛した
ついに彼女には彼の子供ができた

She leaned her back against a thorn,
And there she had two pretty babes born.

彼女は背中をいばらにもたせかけた
そして、そこで2人の可愛い赤ん坊を生んだ

She drew her scarf from off her head,
And bound those pretty babes hands
and legs.

彼女は頭からスカーフを取った
そして、可愛い赤ん坊の手と足を縛った

She layed those babes across her lap,
And swore they'd never sop milk nor pap.

彼女は赤ん坊をひざの上に寝かせた
そして、2人は乳もパンがゆも吸うことはないと言った

She drew the little dresses apart,
And stabbed those pretty babes to the
heart.

彼女は小さな子供服を引き離した
そして、可愛い赤ん坊の心臓を突き刺した

She wiped the knife all on the grass,
The more she wiped the blood ran fast.

彼女はナイフを草で拭いた
拭えば拭う程血が流れ出た

She washed her hands all in a spring,
Then came to return a maid again.

彼女は泉で手を洗った
そして再び乙女になった

As she came to her father's ha',
She saw two pretty babes playing at ba'.

彼女は父の屋敷に戻った
すると、2人の可愛い赤ん坊がボールで遊んでいた

"O babes, o babes if you were mine,
I dress you both in silk so fine."

「ああ、赤ちゃん、赤ちゃん、もしもあなた達が
私のものならば
2人共きれいな絹の服を着せてあげるのに」





They said, "O mother, when we were yours,
You neither dressed us in silk nor coats."

"O you took out your little penknife,
And parted us and our sweet life."

"O babes, o babes what can I do,
For the wicked crime I've done to you?"

"Spend seven years like a fowl in the wood,
And seven more like a whale in the sea."

"O seven years you'll ring a bell,
The rest of time you'll spend in Hell."

2人は言いました「ああ、お母さん、私達が
あなたのものだった時
あなたは私達に絹の服も長衣も着せてくださ
い
ませんでした」

「あなたは短剣を取り出して
私達を切り殺して、私達の短い命を奪いました」

「ああ、赤ちゃん、赤ちゃん、私はどうしたら
(X)のしょう
私があなた方に犯した恐ろしい罪の償いに」

「7年の間、森の鳥のように暮らさい
そしてもう7年、海の鯨のように暮らさい」

「そして7年の間、あなたは鐘を鳴らすのです
残りの年月は地獄で過ごすでしょう」



《解説》

古代スカンジナビア人がイギリスに侵入した頃(9世紀)北方からもたらされた物語に由来するもので、非常に古くから伝わるバラッドです。初めて文字(written tradition)になったのは1776年(Herd's Ancient and Modern Scottish Songs)で、あらすじを同じくする異型の詩(バージョン)が数多く見られます。いずれのバージョンにも、2、4行目に refrain(くり返し)を有する事、又、古代民間信仰が随所に見られる(犠牲者の血がナイフから決して洗い落とせない、投げ捨てたはずのナイフが再び手に戻ってくる、及)いは、生の世界へ完全に加わる儀式—この場合は荒れ命名式—を受けないうちに死んだ者は生きている者を悩ますために戻ってくる、という様な観念は古代の民間

信仰なのだそうです。)ことなどから、口碑(oral tradition)としては非常に長い歴史を持ったものだという事が分ります。分布範囲もイギリス諸島だけでなく、発生源と推定されるスカンジナビア、デンマーク、ドイツを始めアメリカにまでよく知られており、英語圏では子供の遊び歌にもなっています。

Dave & Toni Arthur の他、A. L. Lloyd、(Topic 12T 103 "English And Scottish Folk Ballads"), Fran-
kie Armstrong (Topic 12 TS 216 "Lovely On The Water"), Martin Carthy (Topic 12 TS 345 "Land Fall") 等も歌っています。陰惨なストーリーを持つこのバラッドが、いずれも美しいメロディーで歌われています。

(東野 和子)

"The Cruel Mother"

from "Herd's Ancient and Modern Scottish Songs" 1776年

1. And there she's leaned her back to a thorn,
Oh and alelladay, oh and alelladay
And ther she has her baby born,
Ten thousand times good night and
be wi thee
3. And she's gane back to her father's ha,
She's counted the leelest maid o them a'.
4. "O look not sae sweet, my bonnie babe,
Gin ye smyle sae, ye'll smyle me dead."
2. She has houked a grave ayont the sun,
And there she has buried the sweet babes in.



"The Cruel Mother"

from the singing of A.L. Lloyd

in his Album "English And Scottish Folk Ballads" Topic 12T 103

1. She leaned herself against a thorn,
All alone and so lonely,
And there she had two pretty babes born,
And it's down by the greenwood sidey.
2. And she took off her ribbon belt,
And there she bound them hand and leg.
3. Smile not so sweet, my bonny babes,
If you smile so sweet, you'll smile me
dead.
4. She had a penknife long and sharp,
And she pressed it through their
tender heart.
5. She digged a grave beyond the sun,
And there she's buried the sweet babes in.
6. She stuck her penknife on the green,
And the more she rubbed, more blood
was seen.
7. She threw the penknife far away,
And the further she threw the nearer
it came.
8. As she was going by the church,
She seen two pretty babes in the porch.
9. As she came to her father's hall
She seen two pretty babes playing
at ball.
10. "O babes, o babes, if you were mine,
I'd dress you up in the scarlet fine."
11. "O mother, o mother, we onve were thine,
You didn't dress us in scarlet fine."
12. "You took a penknife long and sharp,
And pressed it through our tender heart."
13. "You dug a grave beyond the sun,
And buried us under a marble stone."
14. "O babes, o babes, what have I to do,
For the cruel thing that I did to you?"
15. "Seven long years a bird in the wood,
And seven long years a fish in the flood."
16. "Seven long years a warning bell,
And seven long years in the deeps
of hell."



BOOKS

"The Seeds of Love" Compiled and Edited by Stephen Sedley
published by TRO Essex Music Limited
in association with the English Folk Dance & Song Society

67年、スティーヴン・シドリーによって編さんされたこの "The Seeds of Love" は、イングランドを主としたフォーク・ソング、バラッドから、愛に関するものをピック・アップして、恐らくは妻であろうアンに捧げられたものです。彼の仕事は、地域的なトラディショナル・シンガーを訪ねるのではなく、文献やレコードからの抜粋であるから、イワン・マッコール、ピーター・ケネディ、A・L・ロイドといった権威者達と接触して、数多いヴァージョンの中から、「愛」の歌に相応しくかつ面白いものに歌詞を集約しています。

全体は歌のパターン別に8つに分類されていて、1. "Boy Meets Girl", 2. "Courting", 3. "Desire is a Witch", 4. "Lost Love", 5. "A Step Too Low", 6. "The Cold Clay", 7. "It's Better to Stay Single", 8. "True Love" といった具合です。お馴染みの歌も多く、"The Jolly Beggar" (ジャック・ザ・ラッド等)、"For a That" (ファイブ・ハンド・リール)、"Go From My Window" (シャーリー・コリンズ)、"Reynardine" (フェアポート等)、"Little Musgrave" (ニック・ジョーンズ等)、"Waly Waly" (ジューン・テイパー等)他、殆んどどの歌が誰かによってレコード化されているのが窺いしめるところ。

さて、この本によってトラッドの世界に於ける愛の型に触れると、それが極めて即物的な姿を持ち、精神性は言語によって標榜されない事に気が付きます。それは愛が精神を伴わないという意味ではなく、トラッド唱法に於いて感情がスタイルの内部に閉じ込められる

ように、トラッドでの愛はその具体的な推移の奥に精神を隠したままに生きている、と言えるでしょう。愛は現代の歌にとっても主要なテーマであり続けます。その同じテーマが、伝承の俗話の内では多くの言葉を要せず、ケースの特殊さを誇示せずに咲いて実を結び、或は散る生命を表わしている、それがこの本の主張であるかも知れません。(松平 維秋)

THE SEEDS OF LOVE



(3ページよりつづく)

といっても Alba の良さはただハイランド・パイプを入れて本物の音を出したからというのではなく、パイプ・チューンでのパイプ以外の楽器の巧みなアレンジにあるといえます。つまり、パイプとユニゾンでメロディを奏でるフルート、フィドルに対して、ギター、バズーキ等があえてメロディーを演奏することはせず、強かにリズムを加えることに徹しているという事です。同じ様な楽器編成にパイプを加えた Boys の場合、みんなが同じレベルでメロディを演奏してしまい、ただの合奏という感じに終わっているのは大きく異なり、やはり Sean O'Rourke のセンスを感じさせるものです。

全体としても、パイプによる勇壮な曲と、ストリン

グスによる繊細な曲とが効果的にアレンジされていて、アルバムとしての完成度を高めています。

この様な高水準を持った Alba の唯一にして最大の欠点はそのボーカルの弱さなのですが、まあ、そこまで望むのはちょっとせい沢というものです。何といっても彼等は当代最高のスコティッシュ・インストラルメンタル・グループなのでありますから。(その後のニュースによるとこのアルバムのリリースの後、若き有能なるパイパー、Alan MacLeod は、Alba を離れ、同じスコティッシュ・トラッド・グループ Tannahill Weavers に加わったという事です。さて、今度は Tannahill Weavers のアルバムが楽しみになってきました。)

(森 能文)

B.T.A.S. NEWS

・前号で紹介した Folk Review 誌の講読料が、最近年間ま4.00に値上がりしました。これから申し込みされる方は新しい講読料に従って下さい。なお、この講読料には日本までの船便の郵送料も含まれます。

・E.F.D.S.S.についての御質問を幾つか頂きました。今回は時間的制約もあってお答え出来ませんでした。次号にはその出版物と共に、E.F.D.S.S.の歴史や活動状況等、くわしく紹介したいと考えていますので、どうぞ御期待下さい。

・アリティッシュ・トラッド愛好会の第1回定例会は8月28日、はるばる大阪から駆けつけた熱心なファンも含めて、トラッド好きだけでブラック・ホーク(座席数約40)が満員になるという前代未聞の感動的なシーンのもとに開催され、松平維秋の愛好会発足宣言に続いて、ピート&クリス・コーのフォーク・クラブ・ライブ、新生フェアポート・ライヴ等のプログラムを消化した後、出席者全員が一ツツ、自己紹介を行ない、日頃少教派で虐げられているうっぴんを晴らすかの様に、各々のトラッド体験を熱っぽく披露して、他の人々の暖かい拍手を受け、出席者全員幸福そうな顔でお開きとなりました。

・続いて9月25日の第2回定例会も、「2度もあんなに人が集まるかな？」というスタッフの心配もよそに、再びブラック・ホークが満員になり、前半はニック・ジョーンズのライブを取詩カードと共に鑑賞、後半はレコードを使って、イギリスの3種類のバグ・パイプの聴き比べ等のプログラムを行ないました。又、これらのプログラムの後には、会員によるコンセルティナの演奏や、フィドルとホウイスルの合奏などがあり、第1回と同じく和やかな雰囲気です幕となりました。

・第1回定例会迄にお申し込み頂いた会員約60名の名簿が、すでに出ています。近くのトラッド・ファンと連絡を取り持ちのつながりを持つ時などに非常に有用だと思います。御希望の方は S.A.E. (stamped addressed envelope 一封筒に住所、氏名記入の上切手を貼、たもの。)を同封して、お申し込み下さい。なお、それ以後申し込みされた方々の名簿も近々製作の予定です。

・当会とニュー・ミュージック・マガジン社との連絡不行き届きにより、N.M.M.誌10月号、ランダム・ノート欄に、当会の会費納入方法とは異なる趣旨の記事が掲載され、その方法にそって申し込みされた方々には、大変御迷惑をおかけ致しました。当会の会費納入方法は以前より次の様に決定していますので、以後“OAK”の定期講読を希望される方は、この方法に従って下さい。

郵送の方

3号分の機内紙代として450円(1号につき100円+送料50円)+予備通信費として50円=500円、本来は違法ですが、500円札を普通の封筒に入れて送って下さい。

直接ブラック・ホークへ来店可能な方
3号分の機内紙代として300円

・予想外の好評のために、200部刷った“OAK”No.1はこのNo.2が出る以前に売り切れてしまい、後から申し込みをされた方々にはお渡しできなくて、大変御迷惑をおかけ致しました。No.1もコピーは可能ですので御希望の方はお知らせ下さい。実費でお分け致します。2号以降は部数増加の予定です。

OAK No.1 正誤表

- P2. 左側 才8行 近送→近沢
- P4. 左側 才8節 才3行 SIS→did
- P5. 左側 才16節 才4行 Bur→But
- P6. GLOSSARY wad-wed → wad-want
- P8. 左側 才13行 襦袢→搦袢

